

世界一のスキー実習

海外スポーツ理論及び実習B（ウインタースポーツ）

海外スポーツ理論実習（ウインタースポーツ）

内山秀一・宮崎康文

1. 授業開講の背景

海外スポーツ理論及び実習B（ウインタースポーツ）は体育学部専門基礎科目として、海外スポーツ理論実習II（ウインタースポーツ）は一般体育科目選択科目として開講されている。

本授業の開講は、東海大学創設者で前総長の松前重義博士とペーター・ヴィヒェラ氏（当時オーストリア共和国内閣官房スポーツ局長）との間に交わされた「スポーツを通じての交流」、「国際性の豊かな人材の育成」などを目指したものである。前総長は、首都ウィーンにヨーロッパにおける日本武道（特に柔道）の拠点として「ヨーロッパ武道センター」を設立した。これに対して、オーストリアは世界に誇る「スキー文化」を通じて交流を提案していた。双方とも、スポーツを文化としてとらえ、スポーツ活動そのもの、また学術的な交流は勿論のこと、国際性豊かな人材を育成することも意図していたことは言うまでもない。

このような背景から、東海大学では湘南校舎の学生を中心に、海外スポーツ理論及び実習B（ウインタースポーツ）と海外スポーツ理論実習II（ウインタースポーツ）が開講され（1997年度カリキュラム以降）、3月初旬に世界で最も権威あるオーストリア連邦スキー学校（現オーストリア国立スキーアカデミー）サンクトクリストフ校でのスキー実習が行われている。

2. オーストリア国立スキーアカデミー

オーストリアには、国内に11の国立スキー学校があり、サンクトクリストフ校は「スキーの聖地」とも呼ばれるアールベルク州サンクトアントン、サンクトクリストフ村に位置する。ここは、世界で最も権威あるスキー学校である。そこには、オーストリア国内でもトップ18名のインストラクターが在籍し、実践を通じて、「スキー文化の継承、創造」の役割を担っている。このスキー学校は国立からオーストリアスキー連盟が運営することとなり、「スキーアカデミー」と改称された。スキーアカデミーの責任者であるヴェルナー・ヴェレンドレ校長は、14年間の長きに渡りオーストリアナショナルチームを率いた経歴を持ち、オーストリアにおけるスキー文化の継承とともに「新世紀スキー創造者」として名高い。

3. 授業の概要

授業は、例年3月上旬に行われる。参加学生は、約20名、引率教員は3名である。

秋学期には学内で11回の授業を行い、十分な準備のもとに現地へ向かう。スイス・チューリッヒで時差調整のため1泊し、バスにて移動。翌日より本格的に実習が始まる。学生はサンクトクリストフ・バーンで2～3のグループに分けられ、それぞれにインストラクターがつく。講習や指導は、基本的に英

語で行われるが、ドイツ語が混じり学生が理解しきれないとき、また学生とインストラクターとのコミュニケーションがうまく行かないときなどには、各グループについている教員が手助けをすることがある。

技術的なトレーニングは、ポール（約2.5m）や縄などの用具を用いても行われる。さらに最近体系化されたショートスキーによる段階指導やカービング技術も指導される。それらはオーストリアスキー教程に基づく理論的かつ実践的な内容である。

夕食前には、スキー理論の講義と用具整備の実習が行われる。学生達は、その晩あるいは翌朝から、自分の用具を手入れする。

これまで、降雪や濃霧などの悪天候もあったが、実習はリフトが止まらない限り行われる。実習を行うために、学校もインストラクターも安全には細心の注意を払い、万全の備えをした上で、自信と責任を持って指導にあたっていることが感じられる。

4. 今後の課題と展望

今後の課題として、まず「履修者の確保」がある。費用が高い、単位数が多すぎる（履修単位上限24単位に含まれる）などの理由から履修希望者が減少傾向にある。費用については、費用をできるだけ押さえるため、為替レートのより適当な時期に実習費を振込んでいる。一方、単位数については、春・秋学期に加えてウインターセッションの設置等、カリキュラム運営上の変更が望まれる。

また近年、日本ではスキーよりもスノーボードに人気があることも履修希望者減少の一因であろうが、ガイドンスや国内のスキー実習等を機会にスキーの楽しさ、奥深さを伝えていく必要があろう。

次に、引率教員の人数と費用の問題である。現在、3名の教員が引率にあたっている。これについて大学側の申し合わせ等により1名の引率で十分との指摘がある。しかし、事故の発生など考慮すれば、スポーツ活動を主たる目的とするものについては、事故発生時の対処等を含めて最低2人の引率とその費用を大学側で負担できるよう検討いただきたい。

さらに、一部の学生の語学力不足に伴うコミュニケーション能力の欠如があげられる。しかし、これは、スキーを通じて改善されていく。スポーツは、言葉の壁など簡単に超えていく。

5. 終わりに

スイス・チューリッヒで時差調整のため1泊し、バスにて移動。アウトバーンを駆け抜けると、初春から真冬へと逆戻りする。壮大なヨーロッパアルプスが眼前に現れる。雪の壁を縫うように抜け、スキーの聖地へ足を踏み入れる。

広大なゲレンデは、1週間程度では走破できるはずもない。毎回、新しいゲレンデで新雪を滑る快感は、日本で味わえない。しかし、本来スキーは、生活の手段であった。雪深い中を安全に移動する道具であった。圧雪されているところなどなかったのだ。私達は、スキーの原点に戻る。そして、改めてスキーの魅力と奥深さを実感する。標高2800mからの山岳スキーツアーは絶景と絶叫の連続だ。テレビやビデオでしか見たことのない世界で自分が滑っている。岩肌をぬって谷を降りれば、いくつかの穴（転倒の後）がくっきりと残り、自分の人生を見るようである。

さて、本授業は世界一のスタッフによるスキー指導が行われる。世界の一流に接することは、学生達にとってすばらしい経験となっている。このことは、授業評価はもとより、学生との語らいの中で感じられる。本授業が行われるオーストリア国立スキーアカデミーは、環境、人、技術、そして何より情熱に溢れている。